

ファリスにかわって



おしおきよっ!!

セーラムーンRPG⑥

ファリスにかわっておしおきよっ!!

深森薫

「……まあ、いいだろう。行っていいぞ」

中年の衛兵はぴんと背筋を伸ばした姿勢で、威儀正しく告げた。街を囲む城壁に設けられた検問所を通り抜け、冒険者の一行は街の中へと足を踏み入れた。

「……………腹へった……」

ジュピターが呻きに近い声でぼそりと呟いた。昼食には少々遅い時間である。もうすぐ街に着くから、と騙し騙し歩かされてきたが、それもそろそろ我慢の限界のようだ。いつもは軽々と振り回している大きなバスタード・ソードも、今は背中にずっしりと重たそうに見える。

「メシ屋はないの？ メシ屋は」

そう言っつきよろきよろと周りを見回すが、辺りには店どころか人の通りもあまりなく、たまにすれ違うのは旅姿の商人か、今しがた検問にいた衛兵と同じ制服ばかりである。

「この辺りは兵舎が並んでるみたいね」

マーキュリーが答えた。神に仕える身といえども腹が減るのは皆同じだが、そこは聖職者らしく空腹も慎み深く法衣の下に隠しておくびにも出さない。

「ゴナヤは都会ですもの。大通りにできれば、店はいくらでもあるはずよ」

「そうそう。同じお昼食べるなら、やっぱりゴナヤ名物足長エビのフライよねっ」

人差し指をびつ、と立てて、ヴィーナスが言う。

二人は屋前からずつとこの調子で、ぐずるジュピターをあやしながらここまでやってきたのだ。

「うう、エビフライでも何でもいいから早くメシい」

「るさいわね、もうちよつとなんだから黙って歩きなさいよ」

しばらく黙っていたマーズが刺々しく突っ込んだ。

そう言う彼女も空腹には変わらない。

「あんだよ。大体、マーズが衛兵にケンカ売るから取り調べに時間食ったんじゃないか。男嫌いも大概にしなよ」

ジュピターが恨めしそうに、ジト目でマーズを見やる。

「別に喧嘩売ったつもりはないわよ。ただ、あんまりムサイオヤジだったから『こつちに寄らないで』って言っただけ」

「それって十分挑発的なんじゃあ」

マーズのツッコミを、マーズはとりあえず聞き流す。

そんな言い合いをしているうちに、一行は路地を抜けて表の目抜き通りに出た。

大陸を東西に結ぶ交通の大動脈「銀の街道」。沿道に位置する数々の国や街がその恩恵にあずかり、繁栄を謳歌している。恵み豊かなイーゼ湾を望むゴナヤ王国の都もその一つである。

街は活気に溢れていた。市場にはありとあらゆる種類の出店が軒を連ね、通りはありとあらゆる種類の人々でごった返す。街を囲む城壁の頑強さやその中に入る際の検問の厳しさとは対照的に、街の中は開放感と活力に満ちていた。石畳で舗装されたメインストリートの終点は、真ん中に建国の祖である聖王ヤイエスの銅像が建つ円形広場。その広場に面した一等地に建っているのは、至高神ファリスをまつる大神殿。ファリス信仰はゴナヤの国教であり、ゴナヤ大神殿は世界のファリス信仰の中心

地である。

そして。

「うわぁ。あれが」

「ゴールドデン・グランパス城」

ヴィーナスとマーキュリーが、感嘆を声にした。

その神殿に向かい合うように見えるのがゴナヤ王家の居城、通称『ゴールドデン・グランパス城』。周囲を堀と堅固な造りの高い城壁に囲まれた中庭に、四つの円筒形の塔が正方形を描くように並ぶ。特筆すべきは、各塔の屋上に据えられた、巨大な金の鯨の像。ゴールドデン・グランパスの名の由来でもある。

「噂には聞いてたけど……本当に金色なのね」

ちよつとやそつとの事では怒ることはあっても驚くことはないマーズだが、今日は素直に感嘆の声を上げる。

「城はいいから早くメシい〜」

「そうね。この辺りで適当なお店を探しましょ」

一人話題についてきていないジュピターに、マーキュリーがくすりと笑いながら答えた。

「どこでもいいから早くう」

「やめてくださいっつっ!」

と、広場の喧噪の中から聞こえてくる女の悲鳴。周囲の視線が集まった先は、籐の籠を提げた花売

ファリスにかわっておしおきよっ!!

りの娘だった。

「いいじゃねーか。誰もただで付き合えたあ言ってねえ」

「そうそう。その花全部買ってやろうってんだ、結構な話だろ？」

その娘に絡む、いかにもチンピラ風の大柄な男が二人、一人は黒毛の長髪、もう一人はなんと今時モヒカン刈り。

「客のいうことは聞くもんだぜえ？　なんたって、お客様は神様なんだからな」

「やっ、放してっ！」

腕を掴む長髪男の手を振りほどこうとした拍子に、籠の花が石畳の上にぶちまけられた。その花を、モヒカン男の大きなブーツがぐしゃりと踏みこむ。

娘は悲痛な表情で目を見開いた。口を開けるが声は出ない。

「あーああ。これじゃ売り物になんねえよなあ」

そう言って、へたり込む娘をにたと見下ろす。

「ま、心配すんなや。俺らが全部買ってやっからよお」

長髪男も下卑た笑みを浮かべた。

「ちよっと非道いな、あいつら」

今までぐずっていたジュピターの声音が一変した。

「誰も止めないのか」

チンピラ達はいずれも丸太のような腕をした大男で、人相も悪い上に剣まで提げている。よほど腕

に覚えがなければ到底逆らう気にはなれないだろう。

「ったく、どうしてこの手の輩ってこう没個性なルックスでオリジナリティーのかけらもないセリフを吐くわけ？」

舌打ちするマーズ。

「ほんと、衛兵は何やってんのよ。あたし等よりあつちの方がよっぽど悪人みたいじゃない」

ウィーナスも同調する。

「おい！」

見かねたジュピターが声を荒げた。

「お待ちなさい！」

「ああん？」

が、眉間に縦皺を寄せて男達が振り返った先は彼女の方ではなかった。天から降ってくるような鋭い女の声に、その場に居合わせた全員が頭上をふり仰ぐ。

「嫌がる女の子を無理矢理連れていこうとするなんて、男の風上にも置けないあなたたち！」

皆の視線が、ファリス神殿の鐘楼の上に集まる。

腰まで届くブロンドの髪を風になびかせ、腕を組んで偉そうに胸を張った姿勢でチンピラ達を見下ろしている人影。仮面をつけている所為で顔はよくわからないが、甲高い声とミニスカートから伸びた脚のびちびち加減から若い娘だと判る。

「あまつさえ、せっかくのきれいなお花を踏みにじるなんて、言語道断横断歩道、農家のみなさんだ

ファリスにかわっておしおきよっ!!

って怒ってる!」

娘は男達に向かってびしっ! と人差し指を突きだし、

「とうっ!」

「掛け声とともにひらりと跳んだ。

宙で華麗にその身を翻し、

ぐきっ

鈍い音を立ててチンピラ達の眼前に降り立つ。

「▲☆%\$√cm〒π◇★Ω◎#はあううう……」

しばし煩悶した娘は気を取り直してすっくと立ち上がり、

「とっ……とにかく! 女の子を泣かす悪い奴らは。

このムーンライト仮面が、ファリスに代わっておしおきよ!」

大きく腕を回して派手な見得を切り、装飾の施されたピンクのらぶりーなメイスを構えた。

やんやんやの拍手喝采で盛り上がる野次馬たち。

あまりの展開に言葉もなく固まるチンピラと、通りすがりの冒険者たち。

「おしおき、だあ?」

モヒカン男が唸った。腕の筋肉がびくびくと震える。

「ぎげんなよ、小娘が!」

「やあーつつつつ!」

気合いとともにメイスを振り回すムーンライト仮面。

「うわあ、なんだありゃ、まるでド素人じゃないか」

見ていたジュピターは思わず頭を抱えた。

「ね、あの子、目つぶってる」

ヴィーナスも呆れて顔を引きつらせる。

「へっ、なにやってやがる」

モヒカン男は鼻で笑って、ぶんぶんと空を切るメイスを軽くかわした。
が。

ぼぐっ

「ぐふっ！」

目をつぶったまま闇雲に振り回されるメイスは娘がひよろひよるとよろめいた拍子に予想外の動きをみせ、振り上げた一撃が男の顎を叩き上げのけぞらせる。

モヒカン男はそのまま後ろ向きに卒倒した。

歓声を上げ、勝手に盛り上がる野次馬たち。

「なっ！ こっ、このアマ、やりゃあがったなっっ！」

残った長髪男の、顔色が変わった。かなり本気で、ムーンライト仮面を捕まえにかかると一方のムーンライト仮面は、会心の一撃の手応えに気をよくしてかますます激しくメイスを振り回す。

どちらにしても目はつむったままだ。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「ごつごつとした大男の両手が襲いかかる。

「やあーっっっ!」

くきっ

威勢の良い気合いの声をあげるムーンライト仮面の、右の足首がへにやりと曲がった。バランスを崩して思わず両手をぐるぐると回す。

ごげっ

彼女を捕らえようと伸ばされた腕は虚しく空振り、逆に勢いよく振り回されたムーンライト仮面のメイスが絶妙のタイミングで男の脳天にヒットした。

かくして、大の男二人が石畳に沈んで戦闘は終了。

老若男女の拍手喝采が広場を埋めつくす。「いいぞーっ、ムーンライト仮面っ!」「いよっ、ゴナヤ一!」などと掛け声がかかったりして、もう気分は芝居見物だったりする。

「これに懲りたら二度とおイタをするのはおやめなさいっ!お役人の目はごまかせても、大神ファリスとムーンライト仮面の目はごまかせないわよっ!」

地べたに転がるチンピラ達をびしっ!と指さして、腰に手を当てポーズを決めながら口上を述べるムーンライト仮面。

「聞こえてない聞こえてない」

ヴィーナスの小声のツッコミも歓声にかき消された。

「何事だっ!こら、道を開けろっ!」

と、険のこもった怒鳴り声が群衆をかき分けてやって来る。入国の検問所にいたのと同じ制服の衛兵だ。

「何だこの騒ぎはっ!」

人垣の真ん中に躍り出た衛兵たちは、いかにもチンピラ風の男たちが倒れているのを見つけ、大方の事情に見当をつける。鋭い視線で辺りを見回して彼らを叩きのめした人間を探すが、それらしいものは見あたらない。

ムーンライト仮面の姿は、いつの間にか消えていた。

「おらっ、起きろっ、立てっ!」

衛兵はチンピラ達を乱暴に揺り起こすと、そのまま詰所へとしょっ引いていった。彼らの姿が人混みに消えてゆくと、周りを取り巻いていた野次馬達は一人、また一人とその場を離れ、やがて広場は元通りの陽気な賑やかさを取り戻す。その中でただ一人、チンピラ達に踏みじられた花を拾い集める花売りの娘の姿だけが、先刻までの騒ぎが現実のものであったことを物語っていた。

*

「マスターっ! 足長エビのフライ追加ねっ!」

冒険者の店『金鯨亭』は、ごく普通のメニューに加えてゴナヤ名物と言われる料理がずらりと揃い、冒険者のみならず一般の旅人にも人気の店である。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「ゴナヤチキンのローストとゴナヤヌードルもおかわりっ!」

やっとのことで遅い昼食にありついた腹ぺこの一行はとりあえず注文した品をあらかた食べ尽くし、
ヴィーナスとジュピターの追加合戦に突入した。

「……恥ずかしい」

その様子を眺めながら、マーズはぼそりと呟いて食後の葡萄酒で喉を潤す。

「もうちよつと落ち着いて食べたらどうなの」

「あれ? マーズ、もういないの?」

足長エビを頭からくわえて、ヴィーナスが首を傾げる。

「まだ一皿目じゃない、それ」

「普通は一皿で一人前なの」

「そっか。んじゃ、あたしがもーらいつ」

きんっ!

マーズの皿めがけて伸びるジュピターのフォークを素早い動きで払いのけ、ヴィーナスのフォーク
がエビフライに深々と突き刺さった。

「駄目よっ、マーズの食べ残しはあたしのものに決まってるんだからっ!」

「んなこと誰が決めたの」

ぐっ、とフォークを握り締めて力説するヴィーナスに、聞こえてないと知りつつ一応突っ込まずに
はいられないマーズ。

所在なくフォークを持てあますジュピターに、皆の食事風景を愉快そうな微笑を浮かべて見ていたマーキュリーが黙って自分の前にあった皿を差し出す。ジュピターも微笑んでそれに応えようと、残った料理を頬張った。

「そうこうしているうち、追加の料理が運ばれてくる。」

「そういえば、またムーンライト仮面が現れたんですってね？」

チキンの丸焼きとてんこ盛りのエビフライとヌードルの丼を器用に運んできたウエイトレスの娘が、にこやかに話しかけた。

「また、って、そんなによく現れんの？」

「運ばれてきたフライに早速手をつけつつジュピター。」

「ええ、私も二回ほど見ました。誰かが困っていると、どこからともなく颯爽と現れて、悪者をやっつけて去って行くんです」

「あんなイカれた格好で颯爽も何もーもご」

「そっ……そーそー、なかなか、格好良かったわよね……」

シラけた顔で言いかけたマーズの口を慌てて塞いで、ヴィーナスが愛想笑いで頬をひくひくさせながら相づちを打った。

「と、とても人気があるんですね、ムーンライト仮面は」

マーズの失言をごまかすように、マーキュリーも白々しい質問を返す。

「もちろんですっ！疾風のように現れて、鮮やかなメイスさばきでばったばったと悪を倒す！ムーン

ファリスにかわっておしおきよっ!!

ライト仮面は正義を愛するゴナヤ国民の憧れですっ!」

「いやあ、どう見てもあの戦いぶりにはへっばーもご」

今度はジュピターの口を慌ててマーキュリーが塞いだ。こんなムーンライト仮面シンパだらけの街でよそ者が悪口など言えばどうなるか。

「ねっ、ねえ、ムーンライト仮面って、いったい何者なの?」

ヴィーナスが無理矢理話題を変える。

「そうっ! それっ! やっぱり気になりますよねーっ?」

ウエイトレスは仕事そっちのけで井戸端会議のおばちゃんモードに突入。

「いろんな噂はあるんですけどねー。たまたまこの街に流れ着いたさすらいの冒険者だとか、武者修行中の戦士だとか」

「そんな馬鹿むぐ」 「んなわけねーもが」

「でも、なんていってもファリスの聖戦士の仮の姿、っていうのがもっぱらの噂ですよ」

「は、はあ」

ツツコミたくて仕方のない人々を抑えながら、曖昧な返事をするマーキュリーとヴィーナス。

「中でも、聖堂騎士団のギャラクシア様! 女の身でありながら剣の腕前は団長の折り紙付きの強さで、背も高く、お美しく、あぁーんもうステキっ♡ って感じで。あの方がムーンライト仮面に違いないですわっ!」

「んむむぐもが」 「ぶぐふいっー」

ひとしきり言いたいことを言ったウエイトレスは、抗議の声に耳を傾けることなくカウンターの方へと戻っていった。

冒険者たちの胃袋がようやく落ち着いた頃、店に一人の客が入ってきたことに一行は気づいた。

店に客が入るのは当たり前だが、その客は色々な意味で際立っていた。少し冷たい感じのする目の覚めるような美女。しかし、身につけているのは銀色に輝く板金鎧、しかも随所に細かな装飾の施された立派なもので、そこいらの冒険者が身につけるような代物ではない。整った顔立ちにすらりと伸びた長身。一つに束ねられた腰まで届く長髪は、鎧のきらびやかさに全く見劣りのしない鮮やかな金色。鍛え上げられた剣のような、隙のない美しさの持ち主である。

美貌の女戦士は店に入るとまっすぐにカウンターへと足を運び、店主と二言三言交わすと、客席の方に足を踏み入れた。午後の中途半端な時間で空席が目立つ店内は、いくつかの冒険者らしきグループが、思い思いの場所に陣取っている。女戦士はゆっくりとした足取りで、テーブルの間を縫って歩いた。その強い視線で、何かを探るように――慎重に品定めをする商人のように。

やがて女戦士は、一行の陣取るテーブルの前で立ち止まった。

「そなた達、冒険者だな」

そこそこに騒がしい店内でありながら、呼びかける声は凜としてはっきりと聞き取れた。鎧の胸に象眼で刻まれた交差する剣の紋章から、どうやら騎士らしいと推測される。

「……ええ、世間ではそのように呼ばれることもあります」

答えたのはマーキュリー。こんな店でこんな風に話しかけてくる人間の用件は、仕事の依頼と相場が決まっている。この手の交渉は彼女の役目だ。

「今日この街に着いたばかりだということだが？」

にこやかに応ずる司祭と言葉を交わしつつ、テーブルの様子をちらりとうかがう女騎士。黒ローブの女は食後の葡萄酒、板金鎧と革鎧の二人はまだ延々と食べ続けている。

「ええ、つい今しがた」

「そうか。実は、ひとつ頼みたいことがあるのだが。」

折角くつろいでいる所を悪いが、聞いてはくれないだろうか」

マーキュリーは目くばせで皆の意見を請うた。いいんじゃない、とヴィーナス。ジュピターはチキンを口に入れたまま首を縦に振る。マーズは黙っていたが、これは特に反対のない時の常である。

「内容にもよりますが……どうぞ」

かたじけない、と答えて、女騎士は依頼人として冒険者たちのテーブルに加わった。先刻料理を運んできたウエイトレスがすぐに注文を取りにとんでくる。女騎士は適当な注文でウエイトレスを追い払うと、冒険者たちにもつすぐに向き合い口を開いた。

「申し遅れたが、私の名はギャラクシア。この街の大神殿で、聖騎士としてファリス神に仕えている」

「ギャラクシア？」

「ギャラクシア、って」

「あの、噂の」

「ムーンライト仮面の人！」

だむっっ！

「違うっっっ！ 断じてあれは私ではないっ！」

だむっっだんだんっっ！

「私はあんなイカれた恰好で跳ね回る趣味もなければ、あんなヘタクソのヘボ戦士でもないっ！」

テーブルに拳を打ちつけながら、ミもフタもないセリフを思いきり叫びまくるギャラクシア。

「……そーだよなあ、やっぱ」

チキンのもも肉をかじりながら、ジュピターが同情する。多少とも腕に覚えのある戦士としては、

やはりあれと一緒にされるのは心外だろう。マーズもヴィーナスも、うんうんと首を縦に振っている。

ウエイトレスが嬉々としてエールを運んできた。

「む……それはさておき」

ギャラクシアは咳払い一つして気を取り直し、ウエイトレスがいなくなったのを確かめると再び姿勢良く背筋を伸ばして言葉を継いだ。

「実は私の依頼というのも、その事なのだが。お主ら、どうやら『ムーンライト仮面』のことは既に存じているようだな？」

「ええ、つい今しがた、広場に現れたのを見ました」

ファリスにかわっておしおきよっ!!

マーキュリーが答える。

「それと、噂を少し。ずいぶん人心を得ているようですね？」

「そこまで知っているなら話は早い。私の依頼というのは、そのムーンライト仮面の正体を突き止めて欲しいのだ」

ギャラクシアは少し声のトーンを落としてそう告げた。

「つまり、ムーンライト仮面を捕らえろ、と？」

さらに声を落として、マーキュリー。ムーンライト仮面シンパだらけのゴナヤにおいて、これはかなりヤバイ部類の話である。他のメンバー達も、思わず背中を丸めてテーブルの上に頭を寄せる。

「いや、そこまでの必要は……そういうことではないのだ」

依頼人は小さくかぶりを振ってそれを否定した。

「我々は別にムーンライト仮面を咎めようとは思っていない。いや、むしろ彼女の行動は称賛に値するだろう。ただ。」

ただ、あの『ファリスに代わっておしおきよっ』というのを、何とかやめさせてほしいのだ。おかげで『ムーンライト仮面はファリスの聖戦士だ』などと、あまつさえムーンライト仮面の正体がこっ、こっ、この私だなどという噂がまことしやかに囁かれているでわないかっ!」

だむっ!

だんだん熱くなって思わず語気が少し荒くなる。

「ああ。そーいや、あんた、あれと同じブロンドむぐ」

ジュピターの不適切な発言をヴィーナスが遮った。

「あの『ファリスに代わっておしおきよっ』をこのまま放っておけば、私の、いや、我がゴナヤ聖堂騎士団の名誉に関わるっっ!」

「……心中お察します」

苦笑しながら、ファリスの騎士をなだめるラーダの司祭。

「ん……とにかく、そなた達に頼みたいのはそういうことだ。どうだろう、引き受けてくれるだろうか」

ギャラクシアは少しばつ悪そうに咳払いを一つして、気を取り直した。

「条件を伺います」

皆に異論がないのを見て、本格的な商談に入るマーキュリー。

「報酬は、三〇〇〇フロルでどうだろう。期限は特にないが、早いに越したことはない」

「そうですね、魅力的な条件ですが。仕事の内容柄、情報の収集などにも多少経費が必要と思われるますので」

「む……解った、必要経費は別に支払おう」

「それと、当面の経費と契約料として、報酬の一部を前金で願えますか？」

「では、一〇〇〇を前金で、残りを成功報酬としよう。前金は後で使いの者に持たせる」

聖騎士という職業柄かギャラクシアはあまり世慣れていない風で、商談はもっぱら冒険者の、というよりマーキュリーのペースで進んだ。それでいて相手のご機嫌は損ねていないのだから、彼女に加

ファリスにかわっておしおきよっ!!

護を与えたのが商の神でないのが全くもって不思議である。

「ただし、こちらの財源も限られているのでな。あまり気前よく使わないように」

「ありがとうございます。では、この件お引き受けいたします」

司祭は満足げに微笑んだ。

「よろしく頼む。何か掴めたら報告に来てくれ。大神殿で『聖堂騎士団』のギャラクシアと言えば取り次いでくれる筈だ」

ファリスの聖騎士はそう言って席を立つと、いかにも騎士らしい立ち居振る舞いで踵を返して去っていった。

「ムーンライト仮面の正体、ねえ」

マーズは残った葡萄酒を一口で飲み干し、軽い音を立ててグラスを置いた。

「やっぱり、ここは聞き込みから始めるべきかしら」

マーキュリーも食後の葡萄酒の杯を傾ける。

「聞き込みつつあって当てになるのは盗賊ギルドくらいで、あとは噂話に毛が生えたくらいしか分かんないんじゃない？ でなきや、ファリス神殿がとうの昔に正体突き止めてるわ」

「何もしないよりはいいんじゃない。とりあえず聞いてみて、運良く手懸かりがつかめれば儲けものだと思えば」

それもそうね、と軽く答えて、マーズは椅子の背にもたれてゆったりと脚を組んだ。そうしている間に、食卓上の大量の料理はあらかた空になろうとしていた。

*

王宮前広場の賑わいを目前に見る、人気のない細い路地。

「なあ、マーズ」

隠れるように佇みながら、さえない顔でジュピターが言う。

「ほんとに、やんの？」

「ったり前でしょ、何言ってるの今更」

これ以上はない程つつけんどんに答えるマーズ。

「こんなん、ほんとに出てくるのかな、ムーンライト仮面」

「さあね。やってみなきゃ分かんないわ」

「いい加減だなあ……」

「あのねえ」

不満げなジュピターの態度に耐えかねて、マーズは声を荒げた。

「聞き込みはガセネタばかり、頼みの盗賊ギルドもペケ、三日間街中を散々ウロウロしてもムーンライト仮面は現れずじまい。これ以上もたもたしてたら、あの聖騎士様が『前金返せ!』って怒鳴り込んでくるわよ。私達は何が何でもあのイカレポンチの正義の味方を見つけなきゃいけないの! 解る!?!」

「だからって何であたしが悪役なのさ」

「私は魔法を使う。使い魔も使う。ヴィーナスはムーンライト仮面を尾行する。さて、残った二人で悪役に向いてるのはどっち？」

頭上で二羽のカラスがアホウと啼いた。

「……わかったよ。やりませう、やりやいいんでしょ」

「練習した通りにね」

マーズはそう言うと言文を唱えはじめた。やがて身振りとともに「力ある言葉」が解き放たれると、ジュピターの姿が風体も人相もいかにも悪人風の男に変わる。

「やだなあ」

ジュピターが呟く。術はあくまでも『幻覚』であって実際に姿が変わるわけではないのだが、やはり気分がいいものではない。

「うん、上出来……もう少し目つきが悪い方がいいかしらね」

からかうように言うのと、マーズはさらに人相を悪く変えてジュピターを送り出した。

広場の真ん中に立つ建国の祖ヤイエス騎馬像の下で、マーキュリーは智神ラーダの教えを説いていた。ファリス信仰が国教のこの国ではラーダ司祭の説教に耳を傾ける者も少ないが、それでも幾人かは彼女の前で足を止めて聞き入っていた。

「よ……よお、シスターさん」

そこにならず者風の男が一人、あまり多くない聴衆を押し分け割り込んできた。人相こそ凶悪だが、背中に背負った剣には見覚えがある。

「あたし……お、俺にも色々教えてくれないかな」

男は棒読み口調で言った。魔法のおかげで声も顔に似合った低いドスの効いたものになっているが、そうでなければサル芝居がバレバレである。

「どんなことでしょうか？」

マーキュリーは笑顔を崩さず、打ち合わせ通りの台詞で答える。

「ここは人が多すぎらあ。どっかで二人つきりで話そうぜ」

そう言つて男は彼女の手首を掴んで引き寄せる。

「きゃっ！」

「うあつ、ご、ごめん」

彼女の悲鳴に驚いて、思わず素に戻ったジュピターはその手を放した。

『これも演技のうちよ。いいから続けて』

『え、あ、うん』

マーキュリーに小声で諭されて気を取り直すジュピター。一度放した手をもう一度握りなおした。

「なあ、いいだろ」

「はっ、放して下さい」

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「いーから一緒に来な、って」

「やっ、やめてくださいっ!」

一際大きな甲高い声で悲鳴を上げるマーキュリー。周囲の視線が一気に集まった。

「うっ」『続けて』

「えーと……い、いいじゃねーか、そんなに邪険にすんなよ」

腰の引けたジュピターを諭しながら、狂言は続く。

「ったく、あの手クソ」

路地の陰から見ていたマーズは頭を抱えた。だが、マーキュリーの迫真の演技のおかげで芝居はど
うにかうまくいっているようである。

「こんなサル芝居で本当にムーンライト仮面がー」

「お待ちなさあいつっ!」

突然の甲高い叫び声が、広場中に響き渡る。

「神に仕えるシスターを無理矢理口説くなんて、罰当たりもはなはだしいったらありやしないっ
つ!」

皆の視線が、宿屋の屋根の上に集まる。

腰まで届くブロンズの髪、派手な仮面にミニスカート。

「智神ラーダはもっろん、大神ファリス様だって怒ってる!」

ムーンライト仮面は、ジュピターに向かってびっし! と人差し指を突きだし、

「とうっ！」

掛け声とともにひらりと跳んだ。宙でその身を翻し、狂言芝居を繰り広げる二人と野次馬軍団との間に降り立つ。先日目撃した時より着地が上手いのは、宿屋の屋根がずいぶん低い所為だろう。

「そーいうハレンチな悪い子ちゃんは、このムーンライト仮面がファリスに代わっておしおきよっつー！」

ポーズも決まって、野次馬の歓声が沸き上がる。

「はは……ほんとに出たよ」

苦笑しながら身構えるジュピター。ここでムーンライト仮面を捕らえられればそのままマーズの魔法で姿を消して脱出、捕らえられなくてもマーズの使い魔たちとヴィーナスがムーンライト仮面の後を追うことになっている。だが、やはり取り逃がすなどという失態は演じたくない。ましてムーンライト仮面に負けるなどということは戦士のプライドが許さない。

「たあーっっ！」

金銀の飾りがついたピンクのメイスを振り回し、突進してくるムーンライト仮面。ジュピターは軽く体を返してそれをかわした。

たたらを踏んで立ち止まるムーンライト仮面。

「うわぶっ」

宙を躍ったブロンドの髪が瞬時、ジュピターの視界を遮る。

ごぐっつー！

ファリスにかわっておしおきよっ!!

その一瞬に、でたらめに振り回したメイスが後頭部に炸裂。

「☆\$E≡!♪¥!」

思わず頭を押さえてうずくまるジュピター。その間にムーンライト仮面も体勢を立て直す。

「っ……いつ、今のはまぐれだっ!」

「やあーっつ!」

再び突進してくるムーンライト仮面を、十分な体勢で迎え討つジュピター。

こっつ

と、いきなり石畳にけつまずくムーンライト仮面。

べちゃっ

派手に転んで、

すこーんっつ!

すっぽ抜けたメイスがジュピターの顔面に命中。ごてごてとついた装飾がとげとげして結構痛い。石畳の上に落ちたメイスが、かつん、と音を立てた。

「ーっつっつっつ!」

顔を押さえてちよちよ切れる涙をこらえながら、ジュピターが唸った。

「だあああっつ! このっつっつ!」

怒りの咆哮をあげてムーンライト仮面に飛びかかろうとして、

っるっ

ジュピターが足を踏み出したところは、不運にも今転がったメイスの上だった。体重をかけた足を思いきりすくわれ、

「わっ、たあっ!」

ごぐっ

「★Ω¥◎℃Σ%\$@π▲!……!」

後頭部からもろに墜落したジュピターは、打ち所が悪かったのか、石畳の上に大の字に倒れてそのまま動かなくなった。

やんややんやの大歓声をあげる野次馬たち。

額を押さえて天を仰ぐマーズ。

マーキュリーは声も出さずただ固まっている。

「これに懲りたら二度とおイタをするのはおやめなさいっ!お役人の目はごまかせても、大神ファリスとムーンライト仮面の目はごまかせないわよっ!」

ムーンライト仮面は落ちたメイスを慌てて拾い上げると、例によって腰に手を当て、目を回してひっくり返ったジュピターをびしっ!と指さす得意のポーズで口上を述べる。

「何だっ! いったい何の騒ぎだこれはっ!」

と、これも例によって例のごとく大きな声と制服姿の衛兵たちが群衆をかき分けてやって来る。ムーンライト仮面は声とは反対の方向に駆けだした。

それと同時に二羽の鴉が鐘楼の上から飛び立つ。使い魔の得る感覚は、そのまま術者であるマーズ

ファリスにかわっておしおきよっ!!

に伝えられる。空からのヴィジョンが走るムーンライト仮面の姿を捉えた。どこに隠れているのかは分からないが、ヴィーナスも追跡を始めている筈だ。

「こらっ、どけどけっ!」

その間にも広場の騒ぎは続いている。現れた衛兵たちは手際よく野次馬の整理をすると、倒れているジュピターを強引に起こして後ろ手に縛り始めた。魔法の効果はすでに消えて姿は元に戻っているのだが、そのことを指摘するような気の利いた野次馬はいないようだ。

「あっ! あの一ー!」

「おおっ、怪我はありませんか司祭殿っ! 近頃はこういう柄の悪い輩が多くて我々も手を焼いているところでした」

少し年輩の、リーダー格とおぼしき衛兵がマーキュリーに声を掛ける。兵士らしい礼儀正しさが、人の話は全く聞いていない。

「いえ、違うんです、彼女は」

「後は我々に任せて、どうかご安心を!」

「いえ! ですから」

「だからっ! 違うんだってばっ!」

わらわらと立ち働く衛兵たちの中に、マーズが苛立ちも露わに割り込んだ。

「あのぶっ倒れてるのはそーいうチンプラじゃないのよっ!

マーキュリーも! はっきり言わなきゃ分かんないでしょっ!」

「なっ、何だお前はいきなりっ!」

「だからあれはチンピラじゃなくてあたし達の仲間なのっ! いいから早くやめさせなさいよっ!」

「ちよっ、ちよっとマーズ!」

「……ああっ! 貴様はっ!」

兵士長はマーズの顔を見るなり驚きの声を上げた。

「この間検問で本官を愚弄した冒険者だなっ!」

「だったら何っ!」

「さては、貴様もこいつとグルー——いや、貴様がこの騒ぎの首謀者だなっ!」

「いえっ、あのっ、それは」

ヒートアップする二人にもはやマーキュリーの声は聞こえていない。本当の首謀者がこの司祭だなどとは、実直な兵士長には及びもつかないところである。

「はあ? どーしてそーゆうことになるのっ! 人の話はちゃんと聞きなさいって、ママに教わらなかったの!」

「おのれっ、一度ならず二度までも! 貴様も逮捕だっ!」

「なっ! ちよっ、と何すんのよっ!」

「女として容赦せんぞっ、神妙にしろっ!」

強引に腕を掴む兵士長相手に激しく暴れるマーズ。

「放しなさいよっ!」

ばさばさばさばさばさ

「痛つつつっ！ 何だっ、このカラスはっ！」

ムーンライト仮面を追っていたはずの使い魔までが参加しての抵抗だったが、元来腕力がある方もなく、後から駆けつけた応援の衛兵たちにあっという間に取り押さえられてしまった。彼女の得意とする精霊魔法や古代語魔法は、複雑な手の動きを伴う。両手を封じられた魔法使いはまな板の上の鯉に等しい。

「話は番所でゆっくり聞こう。洗いざらい喋らせてやる！」

暴れるマーズを両脇からがちり押さえ、のびたままのジュピターをずる引きずって、衛兵たちのご一行は人垣をかき分けて広場を後にした。

屋外では暖かい日射しがあまねく地上に降り注いでいたが、地下に儲けられた石造りの牢獄はひんやりとして、少し湿ったカビ臭さが漂っていた。

「……っんつとに……ああもうっ……！」

鉄格子の奥に座り込んだマーズは、有り余る不満をぷすぷすと噴きこぼしている。座る姿勢を変えようとして身じろぎするも、両手に枷をはめられているせいで少々不自由なようだ。

「んつとにムカつくつたらっ！ だから役人嫌いなのよっ！」

「うるさい」

その横で膝を抱えるようにしてうずくまったまま寝転がっていたジュピターが、ぼそりと抗議する。「頭痛いんだよ……頼むから静かにしてくれ」

「何よ。文句ある？ 大体あんたがいけないんだからね。あんなへっほこにぶっ倒されるから。んつとにみつともないつたら」

「……言うな」

ジュピターはすっかりイジけてしまった様子で、ころりとマーズに背を向けるように転がった。マーズは大仰に溜め息をつくとき、それきり口をつぐんだ。

と、誰かの革靴がいかめしい音を立てて階段を下りてきた。

足音は二人のいる牢へと近付いてくる。

やがて、鉄格子の向こうの仄暗い廊下に衛兵の制服が現れた。

「おい、お前ら。釈放だ」

それだけを告げられて二人はのろのろと牢獄から這い出し、愛想の一つもなく踵を返す衛兵の後を黙ってついて歩いた。

何枚もの扉をくぐって、ジュピターとマーズは再び地上に這い出した。常に数名の衛兵たちが交代で控えている衛兵の詰所は、決して狭くはないがどこか雑然としていて、むさ苦しさすら感じさせる。

「ジュピター！ マーズ！」

二人を迎えて、マーカーが安堵の色を浮かべた。その後ろにはギャラクシアの姿も見える。

「ごめんなさい、迎えが遅くなって。ギャラクシアさんをお願いして来て頂いたの。二人とも、大丈

夫？」

「ああ、うん」

ようやく枷の外れた手をぶらぶらと振りながら、ジュピター。マーズも少しだけ機嫌を直してまあね、と答える。

「あ。血が、ほら、ここ」

ジュピターの額の小さな傷に、マーキュリーが触れる。苦い戦闘の記憶を呼び起こされて、ジュピターはぼつが悪そうに力なく笑った。

「まったく、人騒がせな御仁達だ」

再会を喜ぶ冒険者たちの姿を眺めつつ、ギャラクシアが苦笑する。彼女の手には、ジュピターから没収された剣が握られていた。

「本当に、すみません。ご迷惑をおかけして」

「うむ、まったくだ」

兵士長が横から口を挟んだ。

「本来ならば二、三日は豚箱で大人しくしているべき所だが、今日のところはギャラクシア殿に免じて許してやるのだ。感謝するんだぞっ！」

髭を撫でながらえっへん、と胸を張る兵士長。

ぴくりと眉を跳ね上げて拳を握り締めるジュピターを、マーキュリーが首を横に振りつつ視線で制する。

「……偉っそうに」

その後ろで聞こえよがしにマーズが呟いた。そのたった五文字にありったけの刺々しさを込めて。

「なにっ?」

「いえっ、あのっ、ほ、本当に申し訳ありませんでしたっ!」

再びバトルに突入しそうな空気を、マーキュリーが慌ててかき混ぜる。

「それでは、私たちはおいとましますので」

彼女はそう言っ頭を下げると、マーズとジュピターの背中を押してそそくさと詰所を出た。

「……まったく、マーキュリー殿が血相を変えて訪ねて来た時には何事かと思ったが」

通りを歩きながら、ギャラクシアは愉快そうに笑う。既に日は西に傾き、通りは夕闇に満たされようとしていた。

「すみません、ギャラクシアさん。ありがとうございます」

「いや、礼には及ばんよ。もともと私の依頼した仕事だ。しかし、面白いことを考えるものだ。冒険者というのは皆そうなのか?」

そう言っまた笑うギャラクシア。世間一般に堅物と言われるファリスの聖戦士にしては気さくな人物のようで、冒険者たちも思わずつられて苦笑する。

「だが、次はもう少し穏便にやってくれと有り難い。私も立場上『どんどんやれ』とは言えないの

ファリスにかわっておしおきよっ!!

でな。それから、彼らのこともあまり悪く思わないでやってくれ。どうも近頃市中で不穏な動きがあって、彼らも気が立っているのだよ」

「不穏な動き？」 マーキュリーが眉をひそめる。

「怪しい正義の味方が出没するとか」

呑気な口調でジュピター。

「いや、あまり詳しいことは言えないが、近頃街をうろつくならず者どもの数が妙に多くてな。裏に何かよからぬ事があるのではないかと警戒しているところだ」

至極まじめに答えるギャラクシア。

そうこうしているうちに、騎士と冒険者の一団は『金鯨亭』へと戻ってきた。頃合いは日暮れ時、酒場はほぼ満席。

フロアの隅の丸テーブル一つを除いては。

がたんっ！

大きなテーブルを一人で占めてエールをちびちびと舐めていたヴィーナスが、仲間の姿を認めて立ち上がった。人の熱気とぎわめき、料理の匂いと立ち上る湯気が満ち満ちるフロアの隅で、ちぎれんばかりに手を振る。

「やあ、悪い悪い」

「ごめんなさい、遅くなって」

「お帰りなさああいつっつ！」

ひしっ

それに応えるジュピターとマーキュリーの間をすり抜けて、後ろから仏頂面で歩いてきたマーズを抱き締めた。

めりっ

間髪入れずマーズのエルボーが脳天に炸裂。

「ひとが疲れてるときに何すんのよあんなわっ!」

「☆%\$cm!?っ、何すんのよおっっ!」

大声で反論するヴィーナス。予想外の反応にマーズは鼻白んだ。

「本っ当に心配したんだからねっ! 一緒にムーンライト仮面追っかけてたはずのフォボスとデイモスはいいない、広場に戻ってもみんなはいない、ここで待ってても誰も帰ってこない!」

ヴィーナスは大声でまくし立てる。こんな風に感情的になった彼女を見るのは、誰もが初めてのことだった。

「ほんとに……何かあったのかと、思ったじゃない」

最後の言葉は掠れるように、少しだけ震えていた。

「……………悪かったわよ……………ごめん」

大きな瞳を潤ませてじっと見つめるのは、ヴィーナスが人を謀る時の常套手段。そう思っている、突っぱねることはできない。マーズは顔を横に向けたまま、やっと聞こえるほどの低い声で、言い訳をすることもなくただそれだけを口にした。

ヴィーナスは気を落ち着けるように溜め息を一つつくと、ぱっと表情を明るく輝かせてウインクを飛ばす。

「……ま、みんな揃ったことだし、とりあえずご飯でも食べましょ。話したいことも、聞きたいこともたくさんあるの」

そうやって金糸の髪を翻し、さっきまで一人で占領していたテーブルへと皆を誘った。

*

冒険者と依頼人の一行は、人目を忍んで——といっても夜更けのこと、外を出歩いているのは酒場の看板まで飲んだくれていた酔っぱらいくらいなものだが——ゴナヤ・シテイの外れへと歩いてきた。背の高い鉄柵に囲まれた芝生と木々の緑が豊かな一画が、ゴナヤ市民の人生の終着駅、ブルマン墓地である。

墓地の入り口の鉄柵の扉は、当然ながら閉まっていた。ヴィーナスが七つ道具の中から太めの針金を取り出し、扉に下がっている大きな錠前を開けにかかる。

かしゅっ

古代遺跡の入り口や宝箱の鍵とは訳が違う。作業が終わるまでももの十秒もかからなかった。

「見事なものだな」

ギャラクシアが感心したように言う。

「その技、まさか、悪用などしてないだろうな」

「嫌あだあ♡ まさか、そんなこと」

いつもの軽口で受け流すヴィーナス。

「ええ、彼女は遺跡の探索が専門ですから」

すかさず、マーキュリーが素知らぬ顔でフォローする。

つくづく、智神ラーダとは寛大な神である。

「なあ、ヴィー、ほんとにこんな所に入ってきたのか？ ムーンライト仮面」

「ジュピタ、声大きい……まあ、来れば分かるわ。こっち」

そう言って、ヴィーナスは先頭に立って墓地の中へと入っていった。

芝生を横切る石畳の小径を、五人は列をなして歩いていった。頼りは小さな魔法の明かりだけだったが、勤勉な墓守が丁寧に手入れをしているそこはまるで公園のようで、墓地という言葉から想像されるおどろおどろしさは感じられない。小径の両側には、大きさも形も様々な墓石が、あるものは周りを見下すように堂々と、あるものはひっそりと芝生に埋もれるように、思い思いの場所を陣取っている。

やがてヴィーナスは小径を外れ、彫刻をあしらった美術品のように立派な墓石が立ち並ぶ一画へと踏み込んだ。

「ここよ」

彼女が示したのは、その中の小さな墓。長方形の平たい墓石は、刻まれた墓碑銘もうまく読めない

ほどに古びている。

皆が見守る中、ヴィーナスは墓石の端に手を掛けてえいっとめくり上げた。現れたのは、人が一人やっと通れるほどの急な階段。蓋になっていた石は中が少しくり抜かれ、見た目の厚みの割に軽く持ち上がるようになっていた。

「何と。こんな所に隠れ家があるとは」

ギヤラクシアが素直な感嘆の声を上げた。

「成程、ここなら目立たずに出入りできるわね」

辺りをぐるりと見回して、マーズ。まわりを囲むように立ち並ぶ大きな墓石が視界を遮り、墓地の中で死角を作っている。

「さて。もちろん、行くわよね？」

異を唱える者のないのを見て、ヴィーナスは地下へ続く階段に足を踏み入れた。その後にはマーズ、ギヤラクシア、マーキュリーが続く。最後にジュピターが中から入り口の石の蓋を閉めると、ブルマン墓地は再びもとの暗闇と静寂を取り戻した。

時折金属鎧を石の壁に擦りつけなければならぬほどに細い階段は、思いのほか地下深くに続いていた。階段が終わると、石造りの通路が魔法の明かりに照らし出される。こちらは人が二人並んで歩ける幅と、長身のジュピターが背筋を伸ばしても余裕のある高さがあった。壁も天井も床も、何の装飾もなくただ石が敷き詰められているだけの殺風景な通路。光の届かぬその先は、深い闇に埋もれていた。

「かなり年季の入った通路ね」

マーキュリーが誰にもなく言う。

「入り口の石に彫られていた日付が正しいとして、二百年、ってところかしら」

「ま、古代王国の遺跡よりは新しいわね」 マーズが応える。

「なんだ。じゃ、モンスターなんかは居なさそうだな」

と、ジュピター。見せ場がなさそうなので少々つまらない。

「そのかわり、こーいうのって大体あっちこっち罨だらけ……ってギャラクシアさんっっ!」

言いかけてヴィーナスが、物珍しそうに辺りを見回しながら前に出ようとしていたギャラクシアの腕を掴んで引いた。

しゅぶっ!

後ろのめりになったギャラクシアの目の前に、槍のカーテンが天井からぶら下がる。そのまま歩いていたら脳天に突き刺さっていたところだ。

「……………う、」

のけぞったまま、息を呑んで固まるギャラクシア。さすがに聖騎士、悲鳴を上げたり腰を抜かしたりしなかったのは、まあ立派である。

「……って風に、どこに罨があるか分かんないから。みんな、あたしより前に出ないでね」

ヴィーナスはギャラクシアの足許で微かに光る極細の金属線を指で弾きながらそう言うと、槍の隙間をすり抜けて前に出る。そして彼女が壁を何やら探ると、槍のカーテンはきりきりと音を立てて再

び天井に収まった。

「んじゃ、行きましようか。その線、引っかからないでね」

踵を返して慎重に歩き始める、いつもより少し厳しい表情のヴィーナスの後に皆が続く。ギャラクシアも気を取り直し、今度は引っ掛からないように大きく線をまたいで、歩き始めた。

通路はひたすらまっすぐに続いていた。自分たちの足音だけが響く狭苦しい空間を畏の有無を確かめながら慎重に歩いていることもあり、時間の流れが酷くゆっくりに感じられる。

と、前方の光で薄められた闇の中に人影のようなものが現れた。パーティーの間に緊張が走る。

歩を進めるごとに強くなる光に、影ははっきりとした人の姿をもって冒険者たちの眼前に現れた。

「人？」

「もしや——」

「ムーンライト仮面じゃないわよ。彫像みたい——」

「待って。これも畏かもしれない」

皆を制して、マーズが呪文を唱えた。

古代の遺跡などには、時として魔法の力を帯びた彫像が置かれていることがある。侵入者が近付くと突然動きだし、襲いかかってくるものだ。『魔力感知』の術ならば、そのような畏を見破ることも可能である。

「……魔力は持っていないみたいね」

マーズのゴーサインでヴィーナスがそっと近付き、彫像に触れた。特に何も起こらない。

「別に仕掛けがあるわけでもないみたい。ただの彫像よ」

近付いた明かりに、立っている彫像の奥にもう一体、床に横たわる像の陰影が浮かび上がる。

「ねえ。何か、変じゃない？」

マーキュリーがおおずと言いだした。

「彫像のモチーフって、普通、その……あんまり、そういう普通の人はならないと思うんだけど」

「そういえば、これって何か、普通の人のっぽい」

「っていうより、冒険者じゃない？この服装とか」

マーズとヴィーナスも首を傾げた。確かに、革鎧にブーツ、現代風の服装は冒険者のようである。

顔にはかっと目を見開いた驚愕の表情。床に倒れているもう一体も、やはり冒険者風に見える。

「あ……これって、ちょっと、嫌な予感」

マーキュリーが警告を発する前に、ヴィーナスが魔法の光を灯したショートソードを掲げて前を照らした。

光の中にまた一つ、人の影が浮かび上がる。女性のようだが、その頭からは髪の毛の代わりに無数の蛇が――

「見ちゃ駄目っ！」

マーキュリーが叫んだ。振り向きざまに手のひらでジュピターの視界を遮る。マーズはヴィーナス

の襟首を後ろから掴んで思いきり引いた。狭い通路の中で、大慌てでバックした五人が将棋倒しになる。異形の女の姿と冒険者の石像は再び闇の中に隠れて見えなくなった。

「っ、だっ、誰か、見た？」

マーズには珍しく息を切らし、取り乱したように。

「やん、マーズったらこんな所で、いやん♡ みんな見てるうん♡」

「この非常時に馬鹿言わないっつっ！」

「もうっ、まーずのでれやざん……ぎゅむう」

マーズは自分の上に倒れ込んだヴィーナスの襟首をぎゅうぎゅうと締め上げた。

「どっ、どうしてこんな所にメデューサが」

専属ボディガードの手の中から抜け出して、マーキュリーが驚きを露わにする。

「い痛つつ……何、それ」

石の床にぶつけた頭を撫でながら、ジュピター。

「怪物よ。髪の毛の代わりに無数の蛇を頭に生やした女の姿で、その顔を見た人間を石に変えるの」

「そうか。ならば、見なければいいのだな」

ギャラクシアはゆらりと立ち上がると、ブロード・ソードを抜き放つと、

「はあ？」

「偉大なる至高神ファリス、我にご加護を！」

皆が止める間もなく、叫んで闇の中へと飛び込んだ。

しー……………ん

剣劇が始まると思いきや、辺りは自分の息づかいが聞こえるほど静まり返っている。やがて、

「何だ、なにも居ないではないか」

ギャラクシアの気の抜けた声が返ってきた。

「げほげほ……もう。みんなして、びっくりさせないでよ」

絞首刑から復活したヴィーナスがぶつぶつと文句を言う。

「見間違いないじゃないの？石像かなんか」

「あんなグロテスクなもの、何と見間違えるってのよ」

マーズもぶつぶつと反論する。

気を取り直して明かりを高々と掲げ――

『！』

全員が息を呑んだ。

怨嗟の形相で睨み据える濁った瞳。うねうねと蠢く無数の蛇。

魔獣メデューサの姿が、確かにそこにあつた。

身構えるより先に、寒いものが背筋を走る。

「……………あれ？」

だが、誰一人として石になつたものはいない。

メデューサの方も、襲いかかってくる気配は無い。

ギャラクシアが剣で一薙ぎすると、剣はメデューサの体を何の抵抗もなく通り過ぎた。

「……………幻、ね」

緊張が一気に解け、気の抜けたような声でマーキュリー。

魔法の力によって生み出された、実体のない幻。言われてみれば、頭の蛇の動きがどこか単調である。冒険者の石像も、本物が固まったにしては細部の造りが少々雑だ。

「はは。『幽霊の正体見たり枯れ尾花』という奴だな」

本当に強者なのか、ただの知らぬが仏なのか。ギャラクシアの剛胆さに当てられて、冒険者たちは苦笑した。

通路にはさらに侵入者を阻むための罠が幾つも隠されていたが、そのことごとくがヴィーナスの手で発見され、沈黙させられた。やがて、果てしなく続くかに思えたその地下通路も終わりに辿り着いた。

正面を、左右の壁面と同じ石造りの壁が塞いでいるのだ。

「何だ、行き止まりか？」

ギャラクシアが言う。

「まあ、そう慌てないで」

ヴィーナスは慌てず騒がず、正面の壁を丁寧^{ていねい}に調べる。短剣の柄でこんこんと叩きながら、石の継

ぎ目の一つ一つまで。額に浮かんだ汗がひとしずく、頬から顎を伝って落ちた。

「……駄目ね、隠し扉もないみたい」

肩をこきこきと鳴らしながら、溜め息をつく。

「じゃあ、ここに来る途中のどこかに出口が？」

口元に手を当てるいつもの思考ポーズで、マーキュリー。

「くっそお、ここまで来て行き止まりかよ」

ジュピターが腹立ちまぎれに壁を蹴る。

げしげしげし

「やめなさいよ、みっともなー」

ずずっ

マーズのツツコミが入るか入らないかのところで、不意に壁が音を立ててずれた。

「開いた……」

あまりに都合のよい展開に呆れる一行。ヴィーナスは立場上ちよっぴり不満そう。

壁の左端がジュピターの蹴りで押し込まれ、反対側の端が手前に動いたのだ。扉が中に通した軸を中心に回転する、いわゆる『どんでん返し』と呼ばれる仕掛けである。その巧妙に隠された扉の奥には、細い螺旋階段が上に向かって延びていた。

細い階段はくるくると回りながら延々と続く。ヴィーナスを先頭に、慎重に、地面の下からどこかの建物の二、三階くらいの高さまで昇ったところで一枚の扉に行き着いた。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

……ちきつ

最後の鍵も盗賊の技の前に難なく屈し、扉は静かに開いた。先頭のヴィーナスがそつと体を滑り込ませる。魔法の光に照らされた部屋は寝室らしく、出てきたのはタペストリーの裏の隠し扉のようだった。絨毯は毛足の長い上物で、部屋の装飾や調度品も高級品のようだ。ベッドから見え隠れする長い髪は女のそれだ。

ヴィーナスの後に続いてマーズ、ギャラクシア

がちやつがちやつ

そしてマーキュリー、ジュピターが姿を現す。

がちやつ

二人分の板金鎧がきしむ音に、ベッドがもぞもぞと動き、

「ん……………きゃっ!」

いきなり現れた侵入者の団体に悲鳴を上げた。

「見つけたっ!」

部屋の主をびしっ!と指さすヴィーナス。

「ひっ、姫!」

ひっくり返った声で、ギャラクシア。

「はあ?」

彼女のその一言が、冒険者たちの注意を集めた。

この国で『姫』と呼ばれる人物はただ一人。

ゴナヤ王家第一王位継承者プリンセス・セレニティ。

と、部屋の扉が開き、

「何事ですか、プリンセス。またゴキブリでも——！」

隣室に控えていた侍女が顔を出し、侵入者の姿に息を呑んだ。

「『風乙女よ！』」

マーズが封じていた風の精霊を召喚する。風精は侍女が何かを叫ぼうとするより先にその声を奪った。続いてヴィーナスが彼女の腕を取って部屋に引き入れ、

「はあい♡ ちょーっとおとなしくしててねっ」

両腕を痛くない程度に後ろにねじ上げ、動きを封じる。

「っ、姫……こ、れは、一体……？」

「……ギャラクシアちゃん？」

姫と呼ばれた人物は、ギャラクシアの姿を認めて少し安心したようにその名を呼んだ。色白の肌、大きな瞳。愛くるしい、という形容がよく似合う少女である。

「姫？ プリンセス？……ということは、ここはゴナヤ城の中？」

室内を見回して、戸惑いながらマーキュリー。

「どういうことだ——まさか貴様ら、よからぬことを！」

ゴナヤ聖堂騎士団モードになったギャラクシアが冒険者たちに鋭い視線を向ける。

一瞬高まる闘気に、反射的にジュピターが反応した。マーキュリーを背中に庇うように身構える。

「この子よ、この子！ ムーンライト仮面の正体！」

険悪になりそうな張りつめたムードをかき回すように、ヴィーナスがベッドを指さして言う。

「なにっ？」

ギャラクシアは驚いて『姫』の方を振り向いた。『姫』の顔が少し引きつる。彼女もムーンライト仮面と同じく、腰まで届くブロンドヘアと甲高い声の持ち主だ。

「え？な、なな何のこと？」

「ええと、つまりですね。私たちは、最近巷を騒がせている『ムーンライト仮面』の後を追って、ここに辿り着いたわけですね」

少々混乱気味の姫様に、マーキュリーが事情を説明する。

「つまり、その。」

「ずばり、あなたがムーンライト仮面ですね？」

「えっ？ ……………ええっ？」

「じゃじゃーん☆ 証拠物件発見！」

あくまでシラを切ろうとする姫のベッドの下から、いつの間に潜り込んだかヴィーナスが顔をのぞかせる。その手に握られているのは、紛れもない、ムーンライト仮面の『装飾の施されたピンクのらぶりーなメイス』。

ギャラクシアの顔色が変わった。

「ああっ！ 乙女の秘密を見ちゃダメっ！」

「つつつつ……姫っ！何が乙女の秘密ですかっ！」

これは一体どういふことか、説明願いましようかっ！」

「ギ、ギャラクシアさん、声が……」

皆すっかり忘れてるようだが、時刻は真夜中である。

「それで」

プリンセスがひとしきり話し終わるまで、ギャラクシアは腕組みをしたまま、にこりともせず難しい顔でずっと聞いていた。

「毎日毎日、この秘密の通路で城を抜け出していた、と？」

「ねえ……ギャラクシアちゃん、もしかして、怒ってる？」

上目遣いに、おずおずと尋ねるプリンセス。

「当たり前です！ 城を抜け出すのみならず家宝のメイスまで持ち出して、正義の味方ごっこなど」

『「ごっこ」じゃないもんっー！』

急にプリンセスの口調が強くなった。

「あたしだって、正義のために何かしたいの！ プリンセスだなんて、ただ守られてるだけじゃ嫌なの！」

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「お黙りなさい！」

ギヤラクシアはその上を行く強さで一喝する。

「そんな甘い考えで正義が守れるなら苦労はしません！ 私達が何のために厳しい修行をしているとお思いですか！ 正義を守る者にはそれなりの強さが求められるのです！」

「でも、メイスの魔法があれば」

「それが甘いと言うんです！」

プリンセスの反論は火に油を注いだだけだった。

「道具の力に頼って、何が正義ですか！ 己の精神と肉体の強さがあってこそその道具なのです！ いですか、昔から『生兵法は大怪我の元』と言うように——」

以下省略。

「でも、まあ……確かに、こんなメイスが手元にあつたら、使ってみたくもなるわねえ」

ギヤラクシアとプリンセスには聞こえないように、ヴィーナスが仲間に囁いた。

ゴナヤ王家に代々伝わる家宝。一見したところただの少女趣味なメイスだが、その強大な魔力は使用者に力と技を与え、また正義を行うための仮初めの姿をも与えるという——要するに、このメイスを使うと強くなれるうえに変身までできてしまうのだ。

「だって、あのお姫様がジュピターを叩きのめせるくらい強くなんのよ？」

「……それを言わないで……お願ひ」

そう言うジュピターの顔はとて悲しそうである。

「大体、このような秘密の抜け穴というのは一大事が起こった時に最後の切り札として使うものであって、むやみやたらに使うものではありません！ 入ってきたのが私達だからよかったようなもの、これがお家の転覆を狙う不逞の輩だったらどうするおつもりですか！」

生真面目な聖騎士の説教は延々と続いた。

*

それから三日後。

旅支度を整えた冒険者四人はゴナヤでの最後の食事を終え、『金鯨亭』を後にした。

聖王ヤイエスの騎馬像が見下ろす円形広場は、彼女たちが初めて訪れた日と同じ活気に溢れている。

「あの金の鯨も、見納めね」

歩きながら、マーキュリーがしみじみと漏らした。ゴナヤ名物ゴールデン・グランパス城の金の鯨も、初めて訪れた日と同じように陽光を浴びてまばゆく輝いている。

「うん。結構いい街だったね、うまいもんが沢山あって」

ジュピターの価値判断の基準は実に解りやすい。

「そうそう、フトコロも暖まったしね。あのギヤラクシアって人、報酬上乘せしてくれたりして結構太っ腹じゃない」

ヴィーナスの価値判断の基準も結構解りやすい。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「そうね。でも、こんなに衛兵が偉そうにしてる街はご免だわ。窮屈でかなわなったら」

マーズの辞書に果たして満足という文字はあるのか。

四人はそれぞれの思いを胸に、大勢の人でこった返す広場を歩いた。

「おうおう！ 何とかいったらどうなんでえ！」

喧噪の中、野太い男の怒鳴り声が一際大きく聞こえてきた。

背の高い凶悪そうな顔の男が若いお兄ちゃんの胸ぐらを掴んで、どうやらいちゃもんをつけているようである。

「うおーっ！ 痛エよう、アニキーっ！」

その横で、小柄な男が肩を押さえてしゃがみ込んでいる。

「ほれ見ろお、可哀想にこいつ、お前さんがぶつかつたせいで肩の骨が折れちまつたんだぜえ？ こ
の落とし前、つけてくれるんだろうなあ？」

半ば宙づりにされるようにして、若いお兄ちゃんは真っ青な顔でただうろたえるより他になかった。

「でた……チンピラ」

「お約束ねえ」

思いきり呆れたように、肩をすくめるヴィーナスとマーズ。

「ああいう輩が多いって、ギャラクシアさんが言ってた通りね」

マーキュリーも溜め息をつく。

「止めようか？」

ジュピターはそう言ってマーキュリーの方をうかがうと、気をつけてね、という言葉に背中を押されるように進み出た。

「おい！」

「お待ちなさい！」

不意に天から降ってくる金切り声が、ジュピターの怒りの声をかき消した。

「人の良さそうなお兄さんを、大きな声で脅かすなんて！」

皆の視線が、メシ屋の屋根の上に集まる。

長いブロンドの髪を陽光にきらめかせ、腕組みをしてチンピラ達を見下ろしている人影。

あまりのことに、開いた口がふさがらない冒険者たち。

「そんなへぼへぼ芝居でいちやもんつけたって、神様はちゃんとお見通しよっ！」

人影は男達に向かってびしっ！ と人差し指を突きだし、

「とうっ！」

掛け声とともにひらりと跳んだ。

野次馬軍団とチンピラ達の間ですたっ、と着地し、

「人々の暮らしを脅かす不逞の輩！このスーパーマンライト仮面が、ファリスに代わっておしおきよ！」

いつもよりちよっと小難しい言葉を口上に織り込んで、大きく腕を回して派手な見得を切る。装飾の施されたピンクのらぶりーなメイスをびしっ！と構えると、

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「いよっ！ 待ってました！」「いいぞー！ 千両役者！」

やんややんやの拍手喝采が野次馬たちの間から飛ぶ。

あまりの展開に、もう開いた口もふさがりやしない冒険者たち。

「ちっ！ 出やがったか！」

長身の男は苛立たしそうに舌打ち一つ。座り込んで痛い痛いを連呼していた男も元気に跳ね起きる。そして、いきなりダツシュで逃げだした。

「おらおら、どけーっっ！」

小男が鞭を取り出し振り回す。避けた野次馬たちの間をすり抜け逃げるチンピラ達。

「ああっ！ お待ちなさあいっっっ！」

ムーンライト、もとい、スーパームーンライト仮面も慌てて後を追った。

「ああっ！ ちょっと、追っかけてっっちゃったわよ！」

シヨックから立ち直ったヴィーナスが叫ぶ。

「一体何考えてんのよあのバカ娘はっ！」

思わず悪態をつくマーズ。

「そりゃいいけど！ どうするんのさっ！」

焦れたように、ジュピター。

「放っとくわけに行かないでしょ！」

マーズの声に、四人は弾かれたように走り出した。

広場の人混みの間をすり抜け、路地へ。幾つもの角を曲がり、逃げるチンピラ達、追う「スーパー」ムーンライト仮面、そのまた後を追う冒険者たち。マーズの使い魔達もそれに従う。

「ねえっ、『スーパー』ムーンライト仮面って、どのへんがスーパーなわけ？」

「んなの知らないわよっ！」

チンピラ達の逃げ足は恐ろしく速い。それを追う「スーパー」ムーンライト仮面も速い。かなりハイレベルな追いかっこである。次第に冒険者たちが遅れを取り始めた。

「先に行くねっ！」

ヴィーナスが一歩前に出た。スピード勝負なら盗賊の面目躍如である。残る三人はじりじりと後退し、やがて姿も見えなくなるほど引き離された。

後ろに流れる風景は次第に、普通の町並みから倉庫街へと変わっていった。幾つもの、窓のない煉瓦造りの大きな建物の間を駆け抜け、港へ。棧橋には大小の船が繋がれ、岸壁を波が洗う。

「お待ちなさいっ！」

チンピラ達は後ろをちらちらと気にしながら走る速度を上げ、船渠ドックの中へと駆け込んだ。ムーンライト仮面も後を追って建物の中へと入ってゆく。

窓から射し込む光が、巨大な倉庫のような船渠ドックの中を照らし出していた。そこに船の姿はなく、広い作業場には船を建造するための材木や工具、にかわやタールの詰まった樽だの木箱だのがいたると

ころに積み上げられている。天井からは、まるでジャングルの木々に絡まる蔓のようにロープやチェーンが幾つもぶら下がる。

袋小路に追いつめられた大小二人のチンピラ達は、逃げるのを諦め後ろを振り返った。

「さあ、もう逃げられないわよっ、観念しなさいっ!」

メイスを構えてポーズを決めるムーンライト仮面。

「バあか、観念するのはお前だっ!」

逃げ回っていたチンピラ達の態度が急に大きくなり。

積み上げた樽の蔭から、材木の後ろから、ばらばらと現れる人相の悪い男達。手に思い思いの得物を持った、その数ざっと二十人強。

頬を思いきり引きつらせるムーンライト仮面。慌てて振り返った時には、唯一の出入口は一際ガタイの大きな男達に固められていた。

「ひよええええええ……」

仮面の下で、プリンセスは自分の頬から血の気が引く音を聞いた。

「お嬢ちゃん、ちよつとおイタが過ぎたようだねえ? いけないなあ、おじさん達のお仕事の邪魔しちゃあ」

走ってきたチンピラ達の前にずずいと進み出た男が言った。顎には黒髭、頬には刀傷。余裕の笑みを浮かべる眼光鋭いこの男が、どうやらこのヤクザ達の首領らしい。

「おやおや、いつもの『ファリスに代わっておしおきよっ!』はどうしたのかなあ? ま、おとなし

くしてりゃ、命だけは助けてやらなくもないが」

「……じよっ、じよおだんぢゃないわよっ!」

上擦った声で、ムーンライト仮面。構えたメイスの先もふるぶると震えていたりする。

彼女の台詞を鼻で笑って、刀傷の男はばちん、と指を鳴らした。

じりじりと間合いを詰めるヤクザ達。

ムーンライト仮面が必殺のメイスを振り回す。

「やあああああーっ!……:……:あああ?」

後ろから忍び寄ったヤクザその一にあっさり羽交い締めになれ、攻撃終了。

「他愛もない……どれ、まず素顔を拝ませていただけどうか?」

ヤクザその二が仮面を剥がした。ぼつちりとしたブルー・アイに、怯えの色が浮かぶ。

「ほう、結構な上玉だ。いい売り物になりそうじゃねーか」

「なっ、何言ってるのよっ! う、売るなんて、そ、そんなことしちゃ、いけないだからねっ!」

お姫様こそ、悪党相手に何言ってるんだか。

危うし、(スーパー)ムーンライト仮面!

「があっ!」

ヤクザその一が不意に苦悶の声を上げた。

思わず腕を解いたヤクザの背中に、深々と突き刺さるナイフ。

慌てて逃れるプリンセス。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「だっ、誰だ、畜生！」

予想外の、しかも姿なき敵の攻撃に浮き足立つヤクザ達。

「ぷっ！」

「うわあっ！」

続いて別の場所でも悲鳴が上がる。こちらは目潰し弾。

「いたぞっ！」

誰かが叫んだ。一斉に天を仰ぐヤクザ達。

その中をヴィーナスが走る。

常人なら決して歩き回ろうとは思わない高さに縦横に組まれた梁の上を、猫のように駆けまわるヴィーナス。走りながら、手首の鋭いスナップでナイフを飛ばす。

「うっ」

「くはあっ！」

口汚い罵声に混じって聞こえる、男達の短い呻き声。

「くそつたれ、調子に乗りゃあがつて！」

ヤクザ達の反撃。ナイフが、ブーメランが、乱れ飛ぶ。かわすヴィーナスも、さすがに余裕綽々と
いう訳にはいかない。柱の陰に身を隠して様子をうかがう。

「畜生っ、何者だ！ 出て来やがれ！」

「出てっいたらやられちゃうでしょーが」

小声で一人ツッコむヴィーナス。

すこっ!

柱の陰からのぞかせた顔の十センチ横に、ナイフが刺さる音。敵もへぼばかりではないようだ。

「ちよっとお……みんな、早く来てよねえ……」

どこーんっ!

ヴィーナスの眩きが届いたのか否か、突然船渠が丸ごと揺れ、入り口が轟音とともに吹き飛んだ。付近に立っていたヤクザ達が、巻き添えを食って辺りに転がる。

「ひゃあ!? っっ」

激しい揺れにヴィーナスも足を滑らせた。落ちる寸前でロープに掴まり何とかセーフ。

『火炎球』——凝縮したマナの力を一気に爆発させる、古代人の生み出せし破壊の魔法。その強力さ故に魔術師の中には禁忌とする向きもある。

「っ 哈あっ!」

舞い上がる土煙の中からジュピターが飛び出す。鈍い光を照り返すバスタード・ソード。

「姫っ!」

飛び込んでくる影がもう一人。

ファリス大神殿の聖堂騎士、ギャラクシア。

起きあがるうとしていたヤクザ達は、何が起こったのか分からないままあっという間に再び地べたに叩き伏せられた。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「なっ……て、てめえら、何やってやる!」

ヤクザのボスが、一喝する。

「やっちまえ!」

棒立ちだったヤクザ達が、動き出した。

「うおおおおおっ!」

大声を上げ、手に手に武器を持って襲い来る男達。

「——大神ファリスよ、我にご加護を!」

ギヤラクシアは剣を高く掲げ、短い祈りを捧げた。

ジュピターは首をこきこきと鳴らして半身に構える。

「うおっ!」

「うぐふっ!」

刃のぶつかり合う音すらもなく、男達の咆哮が苦悶の声に変わった。ヤクザ達は数では勝るものの、決して互いが連携しているわけではない。これが訓練された兵ならば勝負は分らないが、ただ闇雲にドスを振り回すだけの烏合の衆は所詮彼女達の敵ではなかった。

当のお姫様は、今だその場にへたり込んでいる。

『サラマンダー、炎の精獣——』

マーズが再び呪文を唱えた。指先が優雅とも思える複雑な動きで空を掻き混ぜ、扉を破ったときのそれとは違う韻律で言葉が紡がれる。

「『——我が導きに応え、集いて炎の壁を成せ!』」

ごおっ!

傍らに置かれていたランタンがぱりん、と弾け、炎の舌がうねりながら縦横無尽に走ったかと思うと、

ずごくごくごぼうつっ!

爆発的な勢いで燃え上がり、炎の壁を作り上げた。初めて目にするド迫力の魔法に、度肝を抜かれてかなり戦意喪失のヤクザ達。

だが、これだけの大技ともなると代償も大きい。額を押さえ、よろよろと半壊した入り口の柱にもたれかかるマーズ。並の精神力ならばとっくの昔に昏倒しているところである。

「大丈夫?」

「さあね。後はよろしく」

さして心配そうでもないマーズの問いに、マーズは素っ気なく答えた。

現れた壁は二枚。大乱闘のど真ん中に、左右を炎に囲まれた通路が現れる。

「……………ひよ、ひよええええ……………」

燃える通路の真ん中で腰を抜かしてひたすらおののくプリンセスの前に、ヴィーナスがひらりと降り立った。二枚の炎の間はある程度の広さがあるものの、やはり熱いものは熱い。舞い踊る金髪の端が少し焦げたように匂う。

「ほらっ、立って、走って!」

ヴィーナスは座り込んだプリンセスの手を取って立ち上がらせると、そのまま仲間の方へと駆けだした。

「っあっ！ こ、このっ、待ちやがれっ！」

ふと我に返ったヤクザの首領がその後を追ってくる。

ヴィーナスに手を引かれるまま、転がるように走るプリンセス。

炎の回廊を駆け抜け、冒険者たちの許へ。

面目を潰されたヤクザが、怒りの形相で、短剣を抜き放ち、俊敏な動きで迫る。

ジュピターとギヤラクシアは今だヤクザの群れを相手に戦っている。マーズは既に立っているのがやっど。ヴィーナスはまだ体勢が整っていない。

立ち向かうのはマーキュリー一人。

「くそつたれ、女だからって容赦は——」

どんっ！

マーキュリーの短い祈りの言葉に応えて現れた神の力は、衝撃波となって彼女を護る。ヤクザの首領は見えない力に打たれ、のけ反るように宙を舞い、床に転がった。

「智は力なり——汝、その力、邪な心もて使う事勿れ」

彼女は智神の教えの一節とともに小さく印を切った。

「なんだ、何の騒ぎだっ！」

わずかに残ったヤクザ達が完全に戦意を喪失した頃、ようやく港の警護に当たっていた兵士が駆け

つけた。

「大捕物だ。……今終わったところだ」

剣を鞘に収めつつ歩み寄るギャラクシアの姿を認めると、即座に威儀を正す兵士。

「後を頼む。一人残らずしよっ引け」

朝の魚河岸のようにチンピラ達がごろごろと転がる^{ドック}船渠の中をちらりと覗くと、兵士は慌てて呼び子を鳴らし応援を呼んだ。

「さて、後は彼らに任せるとして」

振り返るギャラクシアが発する憤怒の気を感じて、プリンセスは思わずびくりと背筋を伸ばした。

「もうお分かりですね……姫っ！　そこにお座りなさいっ！」

母親に捕まっていたはずらっ子、へびに睨まれたカエル。慌てて地べたにちんまりと正座するプリンセス。差し向かいにギャラクシアが座る。

「ついこの間あれほど申し上げたばかりだというのに！　どうして！　人の言うことが！　一度で聞けないのですっ！　一体どういうおつもりですかっ！」

「あ、あたしだって、あれからちゃんと考えて——」

強面の兵士達もビビるギャラクシアの恫喝にプリンセスも思わず首をすくめるが、すぐに口ごたえできるあたり、大物の片鱗を思わせる。さすがは第一王位継承者。

「ちゃんと剣の練習したんだもん、じいやに教えてもらって！　スーパーにグレードアップして、今までのあたしとはひと味ちがうんだからねっ！」

ファリスにかわっておしおきよっ!!

冒険者たちが後ろで盛大にコケた。

「くくくっつ！ ほんのちよろつとかじった位で何が『ひと味違う』ですかっつ！」

「ちよろつとじゃないもんっ！ おとといから毎日練習して、ほらっ、手にこーんなにマメだつてできたんだからっ！」

「そーいうのは『ちよろつと』と言うんですっつ！」

口の減らないお姫様を圧倒する迫力のギヤラクシア。今の今までヤクザの団体様を相手に大乱闘を繰り広げていたとはとても思えない元気さである。

「たかが三日が何ですかっ！ 昔から『三日坊主』といって、どんな怠け者でも三日は続けられるものなんですっ！ いいですか、そもそも剣の修行というのは構えに一月、振りに一年といつて基本を身につけるだけでもそれは厳しい稽古が要るのです！ そのくらいのマメが何ですかっ！ 一人前の剣士になるには、それこそ血と汗と涙が――」

「ギヤラクシア様っ！」

と、説教の途中で若い兵士が慌てた様子で声を掛ける。

「もう駄目です、我々の手には負えません！ ここは危険ですからすぐに避難を！」

「？ 何を言っている、ならず者どもは皆――」

振り返ったギヤラクシアの表情が引きつった。

巨大な船渠が、もうもうと煙を上げている。

兵士達が忙しく走り回っているが、建物全体が炎に包まれるのは時間の問題であろう。

「んあー……こりやまた派手にやっちゃまったな」

「あーあ。知らない、っと」

燃える建物を見上げて呑気に呟くジュピターとヴィーナス。

「ねえ、マーズ……」

マーキュリーも無駄とは知りつつ一応聞いてみる。

「魔法で、何とかならない？」

「無理よ」

気だるそうに予想通りの答えをするマーズ。

「もうそんな余力ないもの」

そんなやりとりが続く間にも、炎の舌が窓からちろちろとのぞき始め、やがて屋根を呑み込もうと
していた。

*

「……結局、居残っちゃったわね、私達」

『金鯨亭』のテーブルで、マーキュリーがぼつりと言った。白い湯気の立つカップの中身は香草茶。

「ま、いーんじゃない？ ここのエビフライ旨いし」

ジュピターの価値判断の基準は実に解りやすい。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

「そーね。お城からのお礼とは別に、密輸団逮捕の賞金も貰っちゃったし」

ヴィーナスの価値判断の基準も結構解りやすい。

「港の火事もあのチンピラ達のせいって事でおとがめ無しだしね。よかったじゃない、ねえ、マーズ♡」

「別に最初から私達が咎められる筋合いなんて無いわよ」

マーズは相変わらずの仏頂面で香草茶をすすする。

「やっほー！ いたいた♡ みんなああ♡♡」

不意に、店の入り口から甲高い声。

ぶひゅっ！

思わず飲みかけた茶を吹き出すマーズ。

皆の視線が声の方に向けられた。腰まで届くブロンドを二つに束ねた独特の髪型、大きなブルー・

アイの若い娘が冒険者たちに手を振りつつ駆け込んでくる。

「ああっ！ あんた、プリンむぎゅ」

言いかけたジュピターの口を慌ててマーキュリーが塞いだ。

「こんな所で言っちゃ駄目っ！」

「よかったあー、もうどこかに行ったかと思っちゃった」

「あ、あの、ぶ……何かご用ですか？」

「嫌あだ、かたくなるしいのはなしなし。セレネって呼んでね♡」

冒険者たちの元にやってきたプリンセスはころころと笑って、まるで十年來の友達のように話しかけた。

「この間は、助けてくれてありがとう♡ あの時のみんな、すっごく強くてカッコ良くってね、いやーんもうステキっ♡ って感じだったのっ!……それでねっ、あたし決めたの! あたしもみんなの仲間に入れて? おねがい♡」

「……………」

一瞬固まる冒険者たち。

だんっ!

「ふっー」

テールを叩いて、マーズが声を上げる。

「ぎげんぢゃないわよっ! あんたねえっ、それでも一国のプリンセスふう
言いかけたマーズの口をすかさずヴィーナスが塞いだ。

「ね? ね? いーでしょ、お・ね・が・い♡」

「あに馬鹿言ってるのっ! あんた仮にも王ぞふう」

「……………なあ、どーすんのさ、これ…………」

「…………ギャラクシアさんに、知らせた方がいいかしら」

キレルマーズと脳天気なお姫様を交互に見ながら、ジュピターとマーキュリーは特大の溜め息をついた。

ファリスにかわっておしおきよっ!!

王国ゴナヤの名物は。

お城に輝く金の鯨。

世界一のファリス大神殿。

そしてもう一つは知る人ぞ知る。

正義の味方に憧れる、困ったもんだのプリンセス。

——ファリスにかわっておしおきよっ!!・終

ファリスにかわっておしおきよっ!!

セーラームーンRPG⑥ ファリスにかわっておしおきよっ!!

著 深森薫

表紙 飛鳥圭

2000年 11月 初版発行

2023年 4月 PDF化にあたり加筆修正

発行者 Bitter & Sweet (深森薫)

<http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/>